

韓流とフェミニズム

長谷川 啓

陳光興著『脱帝国——方法としてのアジア』（以文社 2011年11月）、『東アジア海域に漕ぎだす 全6巻』（東京大学出版会 2013年1月～）等が刊行され、いよいよ東風から発想する思想・研究が活発化している。

そして現在、何度目かの韓流ブームが到来し、BSテレビでは韓国ドラマが主流となっている観さえあり、もはや先駆けとなった中高年の女性にかぎらず、老若男女の間に深く広く浸透しているようだ。このような冬ソナに始まる韓流ブームは、日韓関係の厚い壁を突き崩し、私たち日本人の意識・価値観を変容させたといっても過言ではない。これまでの欧米一辺倒だった日本の近代化を問い、アジアの発見にもつながり、アジアの文化を見直す契機となったといえるだろう。

また、韓国ドラマにみるフェミニズム/ジェンダーの視点も、現在の日本のドラマよりも明確に打ち出されている。今回は、韓国ドラマの中の女性像と男性像、男女関係の逆転構造、女性リーダーの表現について考えてみたい。

I 韓国時代劇ドラマに見る女性表象と男性表象

今日に結びつく、女性像と男性像の新しさについて、言及する。

1. 「宮廷女官 チャングムの誓い」

「冬のソナタ」はキムチの匂いのしない純愛ドラマだからこそ、欧米文化を内面化した私たちに、すんなりと入り込み、心を揺さぶった。それに対して、「チャングムの誓い」はまことに東洋文化そのもので、私自身にとって冬ソナが韓流の入り口だとしたら、チャングムは真の意味でアジアに目覚めさせてくれたドラマだった。

このドラマの演出はイ・ピョンフン（「イ・サン」の監督）、脚本はキム・ヨンヒョン、主演はイ・ヨンエ、共演はチ・ジニである。

韓国では最高視聴率57%を記録したドラマで、日本でも大人気となり、中国・香港・台湾・タイ等のアジア諸国、ヨーロッパ・中東・アフリカなどの60ヵ国以上で放映されたという。日本では今もまた、7度目くらいの放映がされており、アニメにもなっているという、冬ソナを凌

ぐ人気ドラマだ。なぜアジアほか世界でブームになったかといえば、医食同源と東洋医学・宮廷料理・李氏朝鮮の歴史、そして何と言っても、女性のチャングムが時代の壁（身分制度や性差の壁）を乗り越えて、王の主治医にまで上り詰める姿への共感と応援にあるだろう。

以下に、ヒロインの魅力や男性像、作品の意義について等、列挙してみる。

- ① まず、チャングムの人間像について。どんな逆境・苦境に陥っても屈せずにはげぬのけ、目的の実現に向けて、理想に向かって生きる女性。遠回りを余儀なくされても、むしろそれを肥料にし、マイナスをプラスに転化して目的を遂行する勇気と力強さが魅力である。しかも、心優しくて人の悲劇や困難に目をつぶることができず、好奇心が強いせいもあって、さまざまなトラブルにも遭ってしまう、いわゆる優等生とも違い、むしろお転婆で、挑戦意欲・冒険心に富む女性。知と体験を兼ね備え、聡明で前向き、明るくて大変な努力家でもある。最後は、のぼりつめた宮廷勤務から去り、〈民〉の世界に入って、最初の開腹手術を行なっている。「きっとこれからも、この人は時代に逆らい、時代に問い続けていくだろう」という最終話（54話）最後の夫のナレーションは、チャングムの生き方そのものを象徴的に語っている。
- ② 料理人と「医女」という職業をもつ、働く女性を描いている。1500年代の宮廷では、すでに女性の料理人が存在（実際にはもっと早い）していて、その生活・労働の様子を伝えている。また、「医女」も存在していたが、料理人に比べて身分が低かった。人の体に直接触れたり、妓女の役目もさせられたからだといわれている。
 康熙奉著『知れば知るほど面白い 朝鮮王朝の歴史と人物』（実業之日本社 2011年7月）には、宮廷で医女の制度が始まったのは15世紀の初期で、生活上で男女が交わることを戒める儒教の影響によって、女性が病気になっても男性の医師から診察を受けるのは好ましくなかったからだとある。医女志望者がおらず、最下層の奴婢の中から頭のいい女性を選抜して漢方や鍼灸の知識を学ばせたという。16世紀以降は、医女を宴会に連れ出さない決まりとなり、医女は本来の役割に専念できるようになったが、「チャングムの誓い」の時代の16世紀前半は、ようやく医女が宴会での酌婦役から解放された頃だと言及している。このドラマの原題は「大長今」（テジャングム）だが、チャングムは実在の人物で、朝鮮王朝時代の正史『朝鮮王朝実録』の中宗（第11代王、1506～1544年在位）時代には、10箇所の記述があるそうだ。前半の宮廷料理人として活躍する部分は、完全なフィクションだという。
- ③ 愛のあり方・今後の理想的な男性像を描く。女性をリードするのではなく見守り、女性の夢の実現を助け、アドバイスする男性、愛のあり方。愛する女性のためには、官職・身分も棄てる。ドラマ最終時の、チャングムが妊娠した女性を手術することのみ反対。しかし、それも、チャングムの決断にしたがい、手助けをする。
- ④ 料理人の心得、医術というものの心得を説く。

料理の師匠・ハン尚宮は、弟子である女官チャングムが味覚を失った時、料理をする者に最も必要な味をイメージする能力・「味を描く能力」を自覚させ自信を回復させている。また師匠は、糖尿病が悪化していた明国の使者の体調を配慮して、「いかなる場合にも、食べる方に害になるものは出してはいけない」（『宮廷女官 チャングムの誓い』のすべて』幻冬舎 2005年11月）という料理人としての道理や信念をチャングムに教え、美食よりも健康食を料理させている。何よりも、師匠の教えによる野原での食材探しは、薬草探しにもつながっていた。

最大の医術の心得は、敵も味方も、上層から下層階級まで同様に診察し、医術をこころみることだが、ことにチャングムは最下層の流行病の人々まで診察して治療することに専念している。新たな医術への探求心・挑戦意欲も旺盛である。

- ⑤ チャングムの生き方を通して、絶え間のない権力争い・陰謀に渦巻く宮廷世界を批判。女たちは、その犠牲者として表出している。
- ⑥ 「薬（医）食同源」の世界を描き、食文化の再検討を迫る。食と健康が重要なモチーフとなり、食・薬は分かちがたく結びついていることを教えてくれ、地球破壊に至った今日なればこそ、問いかけてくる作品。
- ⑦ アジア文化の見直し、特に、自然を破壊するのではなく、薬・食を通して、自然と共存するアジアの文化の再発見を促す。

2. 「ファン・ジニ」

ファン・ジニ（黄真伊）は、16世紀に実在した妓生。妓名は、ミョンウォル（明るい月）。生没年などは不詳だが、1520年代に両班の庶子として松都（現在の開城）に生まれ、40歳前後で亡くなったと推定されている。詩や書画の他、歌舞や音楽にも優れた才能を発揮。美貌と気品をもった誇り高き妓生だけに、国中の両班たちが競ってファン・ジニを求めたが、彼女は自分のめがねにかなう人物とだけ宴席を共にしたという。

朝鮮王朝時代（「チャングムの誓い」と同じ中宗時代）を代表する詩人であり、音楽（楽器）、時調（シジョ）・漢詩、舞を愛する芸術家として名高い名妓。この作品では、男尊女卑や階級差別が激しい時代ながらも、自らの信念を貫き、愛と芸に生きた彼女の壮絶な歩みを描き出している（『韓国ドラマ 時代劇王5』株式会社 TOKIMEKI パブリッシング 2009年1月）。

韓国の高校の教科書に、彼女の詩が必ず取り上げられているという。原作もあり、映画化もされているが、ここではドラマに絞って見ていく。2006年に韓国で放映。「チェオクの剣」のハ・ジウオンがファン・ジニを演じる。脚本はユン・ソンジュ、監督はキム・チョルギョ。『韓流時代劇3』（廣済堂あかつき株式会社出版事業部 2009年5月）には、ファン・ジニは、「男性を身分やお金ではなく真心で見る」女性、「華やかなキーセンの生活におぼれず、築いてきた富や名

誉を捨て、本当の舞の精神、芸の道を求めた女性」とある。

このドラマは、まさに「芸と愛に生きた名妓ファン・ジニの波瀾の生涯」(『韓国ドラマ・ガイド ファン・ジニ』日本放送出版協会 2008年8月)を描いた物語である。両班と芸妓との間に生まれ、娘の自由な生を願う母の願望(妓生の娘は妓生にという国の定めへ背き)により寺に預けられるが、妓生たちの美しい舞に魅せられたジニ(少女チニ)は妓生になることを望み、松都教坊に入って技芸の修練に情熱を注ぐ。命を賭けた二度の悲恋を通して、松都随一の妓生、名妓ミョンウォルではなく、民とともに芸に生きる道を開いていく。

以下に、ヒロインの個性と生き方、男性像、作品の魅力等について列挙する。

① ファン・ジニは、真っ直ぐで前向き、誰にも親切で心を開く健康的なチャングムとは違って、技芸を磨きながらも、死に追いやる結果になった初恋の人を忘れかね、自責の念にも苦しみ、恋愛を阻んだものたちや不条理な世を恨みながら、自暴自棄になって飲酒に浸るニヒリスト。人生・社会を呪い、虚無感さえ抱き、権力・社会に反抗的・反逆的行為を常に行なう。心に傷を負って自分に閉じこもり、孤高を保って、他者を受け入れない。恋愛を阻んだのは、身分違いの恋・結婚に反対した恋の相手(両班の息子)ウノの両親と、技芸の達人に育てようとする彼女の師匠ペンムであった。

② 再度、運命的な恋をして再生しかけ(「恨」を解き始め)、心を開き始める。しかし、再び、技芸の師匠の反対(技芸の達成のため。恋愛の成就・結婚は、技芸の達成には邪魔になると考えているため)と、皇帝の親族にあたる男ピョクセスからの横恋慕によって、二人の愛は阻まれる。恋人のキム・ジョンハン(彼女の芸の達成のために別れようとするが、師匠の自死によって落ち込み同じく死を選ぼうとするジニを助けて、一時は同棲もする)が、引き裂かれ、ジョンハンがジニとの関係で罪を問われて処刑される寸前で、ファン・ジニの舞によって救われる。しかしジニは、王の期待する優秀な両班であるジョンハンの将来のため、自分の技芸達成のために、王の許しを得ながらも別れる決意をする。子供を身ごもり、出産を楽しみに自力で育てようしながら、その事実を知らぬまま纏い付くジョンハン(撥ねのけようとして、階段から転落し、子供を失う)。

「チャングムの誓い」との大きな相違点は、同棲中にも、結婚することに対して、お互いの立場・将来を棄てては、互いが本当に生きる道を手放すのではないかと、女主人公が不安を抱いていることだ。二人が結婚によって結ばれる道をとらず、もっと自由な生へ歩み出て行く。

③ ついに、最後の師たる学者のソ・ギョドクに出会って、あらたな技芸の道を発見、真の舞に目覚めたファン・ジニは妓生としての舞を辞めて、野に出て自由になり、自らも解放し、民衆の中で舞の技芸を極める。ジョンハンも両班を辞めて、野に出る。「チャングムの誓い」との共通点は、それぞれ民の中で生きることを目指すことだ。韓国ドラマの監督・脚本家た

ちの、民衆とともにあることを理想とする志、思想がうかがえる。

- ④ 「妓生にとって一番の友は苦痛」とジニに伝え、これまで権力に耐えてきた師匠、松都（ソンド）教坊の行首（ヘンス）ペンムの反逆と自死。ファン・ジニにとってそれは、これまで師匠に反抗的だった自らを問い、舞・技芸というものを根底から考え、師匠をそこに追いやった自責の念に、自死に追い込まれるほど苦しむ。そうしたファン・ジニを助けたのが他ならぬその愛する男性キム・ジョハンであった。しかし、彼との同棲中、愛にのみ没頭できなかつたのは、師匠の死を通して、舞うことの意義を教えられたからであらう。
- ⑤ 王族・両班等権力に対するする妓生たちの激しい抵抗・反逆精神が、このドラマの一番の見所である。明国の使者への反逆に満ちたファン・ジニの言動、彼女と師匠ペンムの王族や両班たちに対する反抗・反逆ぶり。妓生としての身分に耐えつつ、技芸の道を生きる誇り高い姿は圧倒する。ことに、侮辱されて怒りが噴出する師匠・老妓の姿には、男性社会にあつてのこれまでの女性の怒りを重ねて見ることもできる。
- ⑥ 愛する女性を助け、アドバイスし、官職さえ棄て、命に代えても救おうする男性像は、「チャングムの誓い」と共通している。二番目の恋人キム・ジョハンだが、王命により礼曹判書（イェー・ジョパンソ）となり、ジニと再会。明国から朝鮮独自の音楽を廃止し、唐楽だけを演奏するよう圧力をかけられて、母国の音楽「郷音（ヒャンアク）」を守ろうとしていた。彼は、不条理な世に反抗するジニにふさわしく、一時ジョンハンも世捨て人となった過去をもつ。師である趙光祖（チョ・グァンジョ、中宗の時代に活躍した急進改革勢力の代表的人物で粛清されてしまう）を亡くし、失意から官職を離れていたのだった。彼は「真心」を説いて、ジニの凍った心を解きほぐす。子供まで身籠もった恋人に一時執着して自暴自棄になるなど、弱さも示し、チャングムの相手ミン・ジョンホと同じく高潔ながら、より人間味があるともいえる。最後は、自由に技芸の道を歩もうとする彼女を認め、自分も両班の身を棄て、民の中に入っていく。
- ⑦ ライバル同士で、妓生の師匠たちであるペンムとメヒヤンの描き方がすばらしい。ペンムの苦悩や嘆きや誇りなど心の深層に分け入り、他の女性たちも含めて、それぞれの立場の女性たちを内側から描いている。鶴の舞を舞ってペンムが自殺する前後は圧巻である。
- ⑧ 妓生の物語であるだけに、衣装が華やかで、舞の光景も美しい。
- ⑨ 舞・楽器・詩等々の韓国文化の素晴らしさも伝えてくれるドラマ。

両作品の女性表象と男性表象をまとめると、次のようになる。まず、女性像について言及すると、チャングムもファン・ジニも共に強い性格と信念の持ち主であることが共通している。また、血の滲むような努力をおしまず、医術・技芸に秀でている。ともに、復讐心、〈恨〉の心を抱いているが、最後には両者とも恨から解放され自由になっていく。ただし、チャングムの方はいつ

も善人だが、ファン・ジニが悪女的（実在のジニは魔性の女とも言われたそう）な点は、対照的。しかし、両者とも、男性に従順で淑やかな良妻賢母型の女性ではなく、いわゆる「女らしさ」を逸脱している。

男性像の特色を言えば、両作品とも男性の方が階級が上で、恋の相手の身分が低くてもその才能を認め、愛する女性をリードするよりも、あくまでもサポート（2010年城西短期大学女性学講座で、栗原順子も「サポート」と言及）していることだ。己れの身分・官職も棄て命を賭してまで相手を守り、女性の自己実現・目的達成を助ける包容力ある男性たちである。しかも、心優しく、正義感に溢れ、文武両道に秀でている。いわゆる従来の強いだけの「男らしさ」とは異なる男性像だ。そして、女たち同様、男たちも、到達した身分から在野へ、民衆の中に入っていく。

さらに両作品には、韓国ドラマのキーワード、真心・サラン（純愛）・民が掲げられており、それは西洋の民主主義理念に対応する東洋の正義の理念だったとも思われる。

II 韓国現代劇ドラマにみる男女関係の転倒

現代劇にみる男女関係の逆転構造を、作品紹介しながら見ていく。男性の階層が上で、女性の階層が下に描かれている理由を検討する。

1. 「私の名前はキム・サムスン」

2005年夏に韓国MBCで放映され、最高視聴率50.5%を記録。大ブームを引き起こし、社会現象「サムスン・シンドローム」を巻き起こした作品。「人生をあきらめないすべての女性に贈るラブコメディ」といわれた超話題作である。「宮」や「コーヒープリンス」、「ぶどう畑のあの男」などにもさまざまな形で影響を与えている。「宮」のインナーストーリーとして使用されているほど（皇太后が一人でテレビを観ていて、サムスンのお腹を枕にしたジンホンなど、二人の关系到笑いこけている）。監督・演出がキム・サヒョン、ユンチョル。脚本がキム・ドウ。キム・ソナ主演、共演がヒョンビン。

女性なら、必ずや元気になる抱腹絶倒のドラマ。タイトルと同名の、30歳になるため、菓子職人の独身女性が主人公。恋人に振られた上に、パティシエとして働いていた店も首になり、失意のどん底状態の時にレストランを営んでいる（オーナー）年下の青年ジンホン（27歳）に出会う。彼の店で働き、契約恋愛（母親に強制される見合いを避けるため、彼に恋人役を頼まれる）のつもりがやがて本当の恋に変わるまでの、波乱に富むプロセスを描く。精米所の三女であるサムスンも、ホテル経営者の御曹司であるジンホンも、共に〈母子家庭〉で、強い母親に始終叩かれている。痛快なのは、そのイケメンの彼が、年上の彼女にいつも腕力をふるわれる場面である。男女の関係の逆転や、これまでのヒロイン像とは違ってドジで普通の女性（「宮」も同様）

の活躍が、観る女たちに共感と夢と勇気を与えてくれる。実際、このドラマ以降、描かれる女性像が変更を迫られたという。キム・ソナ自身が、このドラマで「自分を大事にすること」「自分自身を愛すること」を、メッセージとして伝えたかっただけと言っている（『キム・ソナが案内する 私の名前はキム・サムスン』朝日新聞社 2007年7月）。

ジンホンは孤独で傲慢な青年。心に傷（自分の運転によって兄夫婦を死なせてしまった罪悪感と、恋人が外国に行ったための失恋）を負っていてもいる。だから、たくましくて快活、ドジで面白くて自分をいつも笑わせてくれるサムスンに惹かれる。自閉的で潔癖な彼を解き放ってくれるのだ。愛する女性によって、人格も人生観も変化していく。孤独で傲慢な青年が変化、成長していく点でも、「宮」や「コーヒープリンス」に影響を与えている。

2. 「宮」

アジアの10ヵ国で社会現象を巻き起こした大ヒット王室ラブストーリーで、大人気のため18話から24話になったという。韓国に現在皇室はないが、もしあったらと仮定して物語が作られたパク・ソヒの大人気少女漫画「宮」が原作。2006年に韓国で放映。監督はファン・インレ、脚本はイン・ウナ、原作はパク・ソヒ、主演はユン・ウネ、共演がチュ・ジフン。

- ① 皇太子のシンは、子供の時から皇太子としての教育を受け、皇室を背負っているゆえに孤独で自由がない。初恋の女性とも別れなければならない、祖父が取り決めた（自分の恩人との約束を果たす）、ある意味で政略結婚ともいえる女性と婚約、結婚しなければならない。その相手は、良妻賢母とはほど遠いお転婆で天真爛漫、自由闊達な娘チェギョンであった。

シンのセリフ：

自分の初恋の女性を皇室に閉じこめたくなかったから、彼女の将来の夢を大切に、結婚に至らなかったが、チェギョンこそ、束縛できない自由な女性だった。

出会った女性の中で、チェギョンが一番輝いていた。

チェギョンのセリフ：

出会った人の中でシンが一番孤独であった。

この二人のセリフに象徴されるように、階級も育ちも性格も異なる二人の結婚生活（成人していないので、皇室規範のため性愛関係に至れないし、祖母の配慮と周囲の強制により初夜を迎えてもそこまで至れない。最後に妊娠の兆候がみられるので、本当の意味で心が結ばれた時に、性愛関係も生じたのであろう）がいかに波瀾万丈を来たしながらも、互いに引かれていくかを描いたラブストーリー。

- ② チェギョンの自由さは、皇室を揺るがすまでに至る。心優しく、家族思いで、庶民育ちゆえの規範にとらわれない性格が魅力。チェギョンの実家は、従来の父親と母親の性役割（男は外・女は内）が転倒しており、家族関係が上下ではなく、平等で結ばれている、といった

中で成長しているからであろう。

- ③ シンは孤独で我慢強く、しかも傲慢で虚勢を張っている（親友は、子供の頃、祖父にもらった縫いぐるみ）という点で、男社会の象徴。そうした男性が前向きで元気いっぱいな自由な女性によって、自分の価値観・生き方・人間性まで変更を迫られていく（皇太子の身分ではなくなったら、自信さえ失いそうになる）。女らしさを脱したお転婆な娘によって、男らしさを解体していく物語ともいえる。原作者は、少女の成長の物語とっていて、確かにチェギョンは周囲に気配りのできる人間へと成長し、勉強嫌いの娘がマカオで向学心を抱き、将来の夢を具体的に願望するに至ってもいる。が、それ以上に変身・成長を遂げていくのがシンであろう。素直に心優しくなっていき、人間らしさを回復する。チェギョンの導きによって、庶民の家族・暮らし・町中を知り、「自分の星を出て」「宇宙征服」（チェギョンの言葉）も可能になる。シンが「あの子（チェギョンのこと）となら、遠く飛ぶことができるような気がした」と言ったことも実現間近となる。
- ④ シンの従兄であるユル（シンの父親の兄で、前皇帝だったが死亡）は母子家庭だけに母親思いの優しい青年で、しかも海外生活も長く、料理なども上手。チェギョンに手作り弁当も持参するほどである。
- シンでさえ、料理を手伝う姿も出てくる。将来の夢の世界に、チェギョンが外で働き、シンが子育て、家事労働する姿も出てきている。
- チェギョンの母は外で働いて（保険の外交員）一家を支え、借金を背負っているためとはいえ、父が家事労働をこなしている。随所に、男と女の性役割転倒の光景が見られる。
- ⑤ 皇室崩壊寸前まで追い込まれる様子を描き、チェギョンの両親に「庶民の税金で食べている」と言わせるなど、皇室批判にもなっている。チェギョンの存在自体が皇室に殴り込みをかけているようなもの。庶民でしかも女性が、皇室の批判的存在となっているのだ。
- ⑥ 結局、最後は、皇室を継承するのは、シンとユルという男たちではなく、シンの姉が女王陛下となる。女性が王位継承者となり、今日の日本皇室の批判ともなっている。
- ⑦ 随所に、男性中心の考え方や社会への転倒をはかる仕掛けがなされており、フェミニズム思想がみられる。家父長制批判となっている。
- ⑧ 最後には、シンもチェギョンも皇室から解放され、彼らに自由な生を生きられる希望を与えている。本当の結婚式もあげることが可能となる。
- ⑨ シンの祖母の言葉「世界の中心にいて思っている時にはものが見えない。そこから一歩退いてこそ、本当にものが見えてくる」というセリフが、大きなテーマといえよう。

3. 「コーヒープリンス」

イ・ソンミの小説「コーヒープリンス 1号店」をドラマ化した作品で、韓国で2007年に放

映される。監督・演出はイ・ユンジョン、脚本はイ・ジョンア、チャン・ヒョンジュ。ユン・ウネが主演、共演がコン・ユ。女性監督作品で、彼女は、「面白いドラマになればと思いました」「人を好きになるということは、異性とか同性の問題ではない」と、語っている。「宮」のユン・ウネがボーイッシュな娘を好演している。

〈母子家庭〉で二人姉妹の長女のウンチャンが、子供たちにテコンドーを教えながら牛乳配達・ラーメン出前配達のアルバイトをして健気に一家を支えている。いつも少年・男と間違えられ、男性しか雇わないコーヒー店にも、男ということで雇ってもらう。その店のオーナーとなる青年、コーヒー製造業社の御曹司に頼まれて、祖母に強制される彼の見合いを壊すために、同性愛の相手・擬装恋人役を引き受け、やがてお互いに本当に好きになっていく（「私の名前はキム・サムスン」と同様）。その青年チェ・ハンギョルは、ウンチャンを男性だと思いこみ、自分はホモセクシュアルなのかと迷いながらも愛しく思っていくのである。ウンチャンの告白によって、ようやく女性だと分かるのだが。人に惹かれ、愛していくことは、同性でもありうることなのだというのを、十分伝えてくれる物語である。舞台がコーヒー店ということもあって、都会的なドラマになっている。ウンチャンは25歳、ハンギョルは30歳近くという年齢設定。

ここでもまた、相手の男性は、傲慢で我が儘、本人は気づかぬまま血のつながらない両親と暮らしていて、どこか孤独の影を引きずっている。ずっと長く従姉を好きだった。そうした彼がウンチャンを愛することで、さまざまな価値観（セクシュアリティについても）・人生観を変更させられ、彼女のバリスタになる夢を実現させる手助けもして、留学もさせたりする。

以上の3作品は、従来の女性主人公とは違って、いずれも女らしくない女性で、いわゆるドジで粗忽者、普通の女性である。「宮」をのぞいて、それぞれが外で働いてもいる。また、男性の方が階級が上であり、傲慢で独りぼっち、初恋の相手がいたという経歴をもち、女主人公を愛することによって、さまざまな価値観を転倒していく。何故、男性の方を、階級を上に出しているのか。それは、男性中心社会の象徴として、その価値観を問い、変更を迫るためであろうと思われる。ドラマは現実の鏡であると同時に、男性の方の階級を上に出ることによって逆転の装置をはかる方法となっている。3作品とも、男によって女が変わるのではなく、女によって男の人格・考え方が変えられていくことを語っている。

以上の女性像・男性像からみても、脚本家に女性が多い韓国ドラマの新しさ、フェミニズム/ジェンダーの視点がバックボーンにあることがわかる。

4. 「ぶどう畑のあの男」（これからの男性像）

監督・演出はパク・マニョン、脚本はチョ・ミョンジチュ、主演がユン・ウネ、共演がオ・マンソク。ユン・ウネが女主人公を演じる。同じく、女らしくないドジな女性。ここでは、デザイ

ナーの夢をもちながらも（熱望しているにもかかわらず、室長に自分のデザインした洋服もアイディアも盗用されてしまう）、親戚から億になる葡萄畑を相続させると言われ、家族に説得されて、農村に行く。その葡萄畑で、大学院も出て農村で働く青年に出会い、〈農〉の大切さに目覚めていく。

葡萄作りを何一つ知らない女性が、その男性に指導されるということで、上記の3作品とは違って、女性の方が考え方を変更させられている。愛や結婚についても、ハムサムで格好よく、医者とか金持ちに憧れていて、「以前は幸せにしてくれる男を捜していたが、今は幸せにしてあげたい」と、受身な愛から、自主的なものに変化する。

きわめつけは、その男のセリフである。「デザイナーになればいい。大地のように、お前を一生支えたい」、俺の大地の水を吸い取ってデザイナーになればいいと、言っていることである。これまでの現代劇でみてきた男性像の先を行く男性像といえよう。これまで、なんと女性たちは男たちを支える大地を強要されてきたことだろう。このセリフに革新的なものを痛感する。男性像も女性像も、従来の規範から抜け出してきた感がある。

様々なトラブルや誤解を超えて、二人は結婚する。デザイナーと農夫の結婚である。いわば最も都会的な職業と〈農〉の組み合わせに、斬新な試みがみられる。都会と農村、都会と〈農〉の共存である。

日本の近代は〈アジア〉〈老い〉を切り捨て、近代化の過程では、〈農〉も切り捨ててきたきらいがある。今、〈農〉の見直し、再発見の時代に入ったばかりの日本の現在からみても、〈アジア〉の再発見を促す映像作品とともに、韓国の映像文化（映画「おばあちゃんの家」も、農・老いの再発見につながる）はいかに日本より先んじているかがうかがえる。女性の視点、フェミニズム/ジェンダーの視点もはっきりと導入されていることは今まで述べてきた通りである。特に3・11後の農の見直し・農の再発見をうながされている今日の日本、若者の農業への参入を考える時に最適なドラマといえよう。

IV 女性リーダーの表象

3・11以降の脱原発への願いも活かされず、再びアジアでの戦争を危惧させる今日の日本の右傾化社会にあって、女性こそ社会・政治への参入が必須であることを痛感させてくれるのが、以下のドラマである。いのちを産み出し、地球の大自然の呼吸と連動する女性の視点、女性リーダーの育成が今こそ必要であることを、ドラマの紹介の中で見ていきたい。

1. 「キム・マンドク～美しき伝説の商人～」(商人の心得)

2010年にKBS製作により放映された30話からなるドラマ。監督はカン・ビョンテク/キム・

ソンユン、脚本はキム・ジンスク／カン・ダヨン。イ・ミョン主演。コ・ドゥシム（キム師匠）、パク・ソルミ（悪女的な幼友達）、ハン・ジュソク（マンドクと相思相愛）、ハ・ソクチン（マンドクに片思い）他出演。

18世紀後半から19世紀初頭にかけて韓国で活躍した実在の女性商人の生涯を描く。金萬徳は1739年に韓国の済州島に生まれて、苦労を重ね波乱に満ちた人生（妓生から商人に転じ、商売の仲買や宿を経営する客主として成功）を歩み大商人となったが、巨富を得ても生活は質素だったといわれている。済州島の大飢饉では全財産を投じて米を寄付し、多くの人々を救済した（日本でも江戸時代に似たような男性商人が実在）。その時代の王である正祖（イ・サン）もその功績を称え、女性としての最高の官位・内医院医女班首を与えた。

ドラマは18世紀末の朝鮮王朝時代。都の漢陽で、マンドクは両親を知らぬまま、養成所を運営するキム師匠（女性）に育てられる。好奇心旺盛で、独創的な考えで商売をして小遣い稼ぎをし、師匠に怒られたりするが、いつかは大商人になって養成所の仲間たちと世界を渡り歩くことを夢見る少女として描かれている。物語の上では、王宮に仕え権力と富に執着する刑判（判事）の息子で、清廉潔白で優秀な後継ぎと愛し合うが、民の側に立つこの青年の思想に影響を与えているのが、マンドクの生き方・考え方であり、彼女を支え続けていて、「チャングムの誓い」の男女像と似ている。リードではなく、サポートする男性だ。

妓生の身（といっても、乗馬による曲芸を特技とし、水揚げに抵抗するような女性）から再会した師匠に救ってもらい、両親も判明（母は海女で殺害され、刑判の父に認知される）、やがて東門の代行首となる。師匠や恋人の死（ともに殺害される）を乗り越え、大飢饉では済州島の民を救済、王のイ・サンに功績を称えられ、金剛山見物を許される。済州島民は、島の外に出られなかったが、王から特別の許可を得たのだった。

運命に翻弄されながらも強く生き抜き、済州島の民に貢献した女の一代記。社会の状況の変化もいち早く読む、実に頭のいい賢い、聡明な女性。「商い」というものの本義を教えてくれる作品。メッセージに富むセリフが素晴らしいので、以下に紹介する。

① 師匠が命尽きる時、マンドクに言い遺す言葉

人の心を得る商いを。お前の真心こそ売りなさい。それでこそ、本物の商人だ。

② マンドクの言葉

商売とは真心です。作り手の心を伝え、買い手の心を得ること、それが私が思う商いです。

③ マンドクの言葉

・恋人ホンスの死を乗り越えて生き抜く際の愛の誓いの言葉

「私のそばで生きてくださると約束しましたね。もう離しません。」

・ホンス様の願い通り商いの自由化へ、闇商人も商いができる自由な商いを許可する法が公布されました。

- ・儲かる品もあれば、損を覚悟で売る品もあります。
- ・人を得てこそお金もついてくる。

④ マンドク言葉

- ・飢饉の時：人を助けてこそ、自分も助かるのよ。今は物ではなく、人を守るべきです。

（イ・サンの部下の進言「法は民を守るためにある」は、今日の日本をも撃つ言葉だ）

- ・王様から「女の身」で商売する大変さを労われた時：

子供の時から市場で育ちました。女に生まれ何処にも夢を見い出せずにはいましたが、商売をしている時は、ただの一度も差別を受けることはありませんでした。これが、私が商いをする理由です。

私は（飢饉による救済で）何一つ失ってはおりません。私の商売の元手は人です。人は失っていないので、何も失ってはおりません。

- ・金剛山見学を希望して、養子（意地悪な女友達の息子を養子にしている）から、両班の身分とかお金を希望すれば良かったのと言われて答える終幕：

両方とも心の足枷になる。心は開いておきなさい。つねに心が自由でないと広い大地でも自由になれず、心が自由な人は小さな島の中でも自由に羽ばたくことができる。

- ・亡くなった師匠に向けて語りかけるラストシーン：

私は人を得る商人になりました。私はもう自由になりました。共に生きていく人たちがいる濟州島に帰ります。

商人の心得を今さらながら説いている女商人の言葉である。資本主義の現代社会では、このような考え方と競争社会から落ちこぼれてしまうが、しかし、モラルをすっかり失ってしまった現代であるからこそ、逆に問いかけてとなって迫ってくる。封建時代（儒教モラルが中心だろうが）の価値観の良い側面かも知れない。商人の本義をあらためて教えてくれるとともに、リーダーとしての心得も教えてくれるように思う。「民」を忘れてはいけない、民に立脚したリーダーでなければならないことを、改めて示唆してくれるのだ。

2. 「シティ・ホール」(女と政治 女性市長)

2009年、SBS放送、全20話からなるドラマ。監督／演出はシン・ウチョル、脚本はキム・ウンスク。キム・ソナ（シン・ミレ）主演。チャ・スンウォン（チョ・グク）他共演。登場人物の名前には、シン・ミレ：新未来、チョ・グク：祖国、ミン・ジュファ：民主化、ジョンド：正道、などの意味が込められているという。

万年お茶くみの女子公務員（10級公務員）が仁州（インジュ）の市長になり、やがて恋人になる男の副市長が国会議員になり大統領候補になって、政財癒着の政界を変革しようとする物語。

初の女性市長の誕生をめぐって、自分の選挙に利用しようとする男性が、逆転して、女性の民に根ざした清浄政治の考えに変更させられていく物語でもある（男女関係の逆転劇）。

女友達で元同僚（ミレが起こした事件で退職させられる）のブミが、彼女を市長にしようとする副市長のグクに、ミレの人柄について「どれだけバカで情けないか」「市民の苦情を解決しようとして、人手が足りなければ畑に手伝いに行く。週末に稼ぐアルバイト代を全額寄付して、恵まれない子供たちを遠足に連れて行ったり誕生祝いに駆けつけたりする」と、愛情込めて言い、「彼女の生活にウソはない。いつも本気です。あんないい子に市長はできません」と言っている。

ミレは真っ直ぐで政治も分からないような女性（シングル、36歳 母は市場でサンマを売っている）だが、その人柄や生き方・考え方に惹かれて、副市長として赴任したグク（財閥の娘と政略婚約している男、39歳。前国会議長の父親の隠し子）は、大統領志望で政治的野心家の父親に反逆していくほど、生き方や政治のあり方を変更させられていく。国会議員となり、「俺は希望の大学に入るために、一位になるために国会議員になるためにここまで来たが、国会議員として何をすべきか、絵がない」とミレに咬いていたが、民のための政治に目覚め、志望通り大統領選に立つ（「冬のソナタ」のように、ここでも、男が女に靴を履かせている。スニーカーではあるが、靴を履かせる行為は愛の表現そのもの）。

以下に、ミレの発言と実践について列挙する。

- * 公約は当選に向けての戦略であって守るものではなく、当選したら真っ先に捨てるものというグクに対して、公約は大きすぎて現実味がないといい、選挙演説の時には、自分の公務員の体験や、物価についてなど、生活に密着した見解を言う。民の生活に根ざした政治を目指し、利権がからむ政治はやらないこと、正当な過程を踏んで結果を出しますと言っている（政治のプロと素人、男と女の逆転の始まりでもある）。
- * 選挙最後の演説では、民主主義への道は皆さんの一票にかかっている、ともいっている（聴衆から、我々を騙さない清浄政治を頼むという声がかかる様や、女が出しゃばるなという女性差別の妨害の声も、ドラマは捉えている）。
- * 無所属のミレは逆転当選し、市長就任挨拶で、政治も知らない素人に何ができるのかと自らを問い、しかし、政治はわからなくても私には夢がある、情の溢れる政治を実現したいと語っている。
- * 市長として耕す場所を見渡しながら、大きい絵を描く。総合病院・市民が行ける図書館のついた大学・託児所建設などである。
「ソウルに比べて夜景が貧相に見えるが、田舎の夜が暗いのは稲のために街頭を消すからです。稲も寝ないと育たない」という発言は、農村社会に根ざし大事にする姿勢が最もうかがえるところだ。
- * 市長になって手がけること

- ・多くの反対に遭いながらも、市庁移転を白紙にする。仁州市の未来は富裕層の利益にかかっているという意見に対して、富裕層のためではなく、庶民に経費の負担をかけないために中止するという。
- ・公用車を一台にして、自らは自転車で通勤する。
- ・自宅から通勤し、市長の公舎を託児所にする。
- ・農繁期だけでも、農民に給食をおくる。
- ・市庁移転場所に託児所や市立病院を建設する道費を希望するが、それと引き替えに、病院は建てるが工場の誘致を要求される。先進国では悩みの種で発展途上国では金になる公害が発生する工場である。溶解した金属から分離させたカス、腐敗しやすい有機物を含む沈殿物（有害廃棄物）を先進国から輸入してつくるリサイクルエネルギーの発電所である。グクの父親が大統領になるための選挙資金を、韓国経済を握っている企業・大韓グループ（創立100年）に援助してもらおうという政財癒着の陰謀であった。ミレ市長は一端は騙されかけたが、調査の果てに、やがて市長生命を賭して阻止（締結前に辞職）。「我々の子供たちが暮らす土地を守るために、有害廃棄物の流入を防ぐ」と。

国会議員のグクも環境法の改正案を成立させて、父親（チェ総裁）に反対し、政界から降板させ、政財癒着を暴露する。

工場誘致の交渉に立った大韓グループの娘でグクの婚約者は、トップの父親に、企業倫理（倫理経営・感動経営を建前とする）を突きつけ、国内の廃棄物を使うリサイクル工場を建設することに変更し、締結される。

次に、グクの大統領選挙演説についても触れておくと、

民の信頼がなければ国ではない。食料と兵力が十分であっても、民の信頼がなければ国ではない。この国の主人公は国民。真の自由と平等、女性の権利の保障等、国民の権利が保障されなければならない。信頼の社会へと変革しなければならない。

と、公言している。

以上のミレとグク両者の言説を通して、ドラマのメッセージが伝わってくるが、水俣病・イタイタイ病、3・11以来悩まされ続けている内部被曝等々、日本の公害問題と重なり、国の政治・市政の問題・地域社会の問題を真剣に考えなければならないことを示唆してくれるドラマである。いのちに根ざす発想に立脚する女性が政治に参加しなければならないことを痛感させ、真のリーダーとは何かを考えさせてくれる。

3・「レディプレジデント～大物」（女と政治 女性大統領）

2010年、SBS放送、全24話からなるドラマ。監督はオ・ジョンロク／キム・チョルギョ、脚本はファン・ウンギョン／ユ・ドンユン。コ・ヒョンジョン（ソ・ヘリム）主演、クォン・サン

ウ（ハ・ドヤ）他共演。

「普通のおばさん」から政治家となり韓国初の女性大統領になったヒロインを演じたコ・ヒョンジョンは、本作で2010年SBS演技大賞を受賞（前年も「善徳女王」でMBC演技大賞を受賞）。ヒロインを支える正義感溢れる検事役を演じたクォン・サンウは、本作で最優秀演技賞を受賞している。

ヒロインであるアナウンサーの夫が放送局からの派遣で紛争国に行き、拉致され、韓国政府の対応の遅れで殺害されてしまう。それに怒ってメディア等々に訴えたりして放送局を辞めさせられたヘリムは、地元へ帰り、同じ地元の検事ドヤ（同じ高校）のところでボランティアなどして、蚊が大発生して暮らしにも困る人々を助けているうちに、元検事で政界に入って国会議員になったカン・テサンに認められ、ドヤやテサンの助けを借りて国会議員になる。ヒロインのヘリムは母と一人息子を抱えているが、率直で親切なので、女性の支援者が多く、国会議員としての補佐役も女性である。夫を失った自らの痛みの経験を語り、国民の痛みを立て、「皆さんが愛のムチで政治家を叩いてください」という選挙演説は感動をよぶ。

所属する党派の党利に利用されかけるが、環境問題、放置されてきたため蚊が大発生する土地にエコ工場を誘致して、大きな鮎や住民が戻ってくるように奮闘（第五共和国・全斗煥の時代、鮎が登る土地を軍事目的等に使用するため放置して蚊の大発生をまねいていた土地を、自然に優しいエコ開発をして再生しようとする）。やがて故郷である南海道の県知事となり、南海道の窮地を救う。さらに知事を辞職して新党結成の代表の一人となるが（与党総裁による南海道への土地提供を交換条件に）、率直で正直で真心ある人柄、民の痛みを根ざす考えを大統領にかわれて「痛みの経験のある人をお願いしたかった」と押され、韓国初の女性大統領となる。国民のための国家を目指して、国を変えるという夢を抱き、国民とともに歩み、国民とともに泣き笑う大統領を目指すのだ。「私みたいなおばさんでも大統領選に出られる」という夢を実現し、国民にその夢を共有してもらいたいと願うのである（この過程で、女同士の結託、シスターフッドも散見される）。

経済成長よりも国民が幸福になるような政治。大統領志望のカンつまり男性が経済成長と発展、一流国・強い国家を目指すのとは逆に、まず金権・密室政治、政経癒着の腐敗した政治から脱し、南北問題も軍事より平和を、祖国の平和的統一を願う。軍事力は平和を守る手段であり、目的ではないことを力説。そして、国民よりもさらに低い目線から発想し、隣人の痛みを分かち合えるような政治を説いている（出馬理由・出馬宣言）。

最初の大きな試練が、諜報活動をおこなっていた韓国の潜水艦が中国の領域に入り座礁した事件への対応であった。交渉中のアメリカから中国に直行、中国政府に救済を願い、一人の犠牲者もなく全員を救うが、韓国の国会から、国辱的行為（中国に頭を下げる）として弾劾を受けたりもする。

大統領就任挨拶（汗水を流して働く人々が幸せになる国を造る，半島の非核化，南北の平和，不正腐敗・政経の癒着の排除などを目指す）もさりながら，5年の任期を終える時の退任挨拶，「強力な国家にするよりも国民を包み込む政治」を，「皆さんが真の国主となるような政治」を願ひ，「政治に失望しないで政治を愛して下さい，それでなければ政治を変えることは出来ません」という国民への呼びかけも素晴らしい。「大物」というサブタイトルは，自分を弾劾する政治家とも時には手を組み，手を差し伸べる大きな器であるヘリムの人格をさしている。大胆な言動も含めてである。痴漢摘発をはじめ悪を看過できない率直さも併せ持っているのだ。

ヘリムは政治改革（女・子供・庶民・生活者の立場から，国民の幸福を願う改革）の側から，ドヤは政治家も取り締まる検事の側から，表と裏の両面から政経癒着・腐敗政治を解体させていく。両者とも正義感が強く，悪を看過できない性格で，大胆に向こう見ずな人間であることも共通している。

その後，ヘリムとドヤは，女性大統領と検事の職をそれぞれ辞めて，貧しい人々を助けたいと，自分が育った地方都市で，検事の父親の韓国料理の店を継ぎ，一緒になる。民の中への真の意味での参入である。「チャングムの誓い」「ファン・ジニ」のように。「民の中へ」（ヴ・ナロード）は，韓国ドラマの究極の理想のようだ。

今，見てきたように，今日の日本の政治を考える時，女が政治に参入する時には欠かせないドラマであり，女性リーダー育成にとっても必見だ。

韓国の現実というより（初の女性大統領も2年遅れに実現），多くのドラマがそうであるように，現実の実態の告発（女性差別も見つめられている）を通して変革への夢を描いたドラマだ。ことに女性の政治参入に変革への夢を託したドラマだが，韓国の現政治を撃ち，日本の政治にも問いかけてくる。成長至上主義，社会保障は自助・自立第一，脱原発棚上げ，憲法改悪への前のめりな日本の政府，被災地に巨大防波堤を築く計画を立てて生態系すら変えてしまおうとする復興のあり方，TPPに参加して日本列島を競争原理に追い立て，国民の格差を拡大するあり方を，痛切に問うドラマだ。

女・子供の立場からの発想，庶民の立場に立つ政治。シングルマザーを主人公とすることで，一見，母性を強調しているように受け取る見方があるが，そうではない。「いのち」を産み，育む社会や政治のあり方が今日いかに重要なことかを説く設定に，女性，なかでもシングルマザーの存在（結婚制度に庇護されていない）が必要不可欠なことと思われる（子供を育てやすい国をつくって欲しいとヘリムに言わせ，外国への移住すら実行しようとする。原発後の日本そのもの）。

恋人は年下で，文字通りサポートする男性像の革新性。男性中心の政治社会を女性によって逆転させる革新性を高く評価したい。経済成長・強い国ばかりを望む男性政治家に対して，いのちに根ざし，民に根ざした政治を説く女性を設定して，逆転劇そのものになっている。

3・11以後、自然や命、〈農〉や絆の大切さを痛感する今日、そうしたテーマを早くから取り上げている韓国ドラマの意義深さをいっそう知らされる思いがする。フェミニズムの今後の方向性も示唆していよう。

どのドラマも、男が女によって変わっていき、民に根ざす発想をもつ。最後の両作品とも、女が政治を変えていかなければならないことを痛切に伝えている。必ずと言っていいくらい恋愛・純愛をドラマの中に布置しているが、それは、政治・社会変革に関心を持たせるための強烈な仕掛けであるといえよう。